

ミュージアム研究員紹介

高山浩司准教授

高山浩司



ハマボウの調査風景（下田市吉佐美）

ふじのくに地球環境史ミュージアムで植物分野の研究員を務めております高山浩司と申します。今年の4月に静岡に移り住んでから、あっという間に8ヶ月が経ってしまいました。本稿では自己紹介を兼ねて、これまでの研究活動とミュージアム活動の抱負を述べさせていただきます。

高校生の時に読んだ小野幹雄先生の「孤島の生物たち—ガラパゴスと小笠原」に感銘を受けて、東京都立大学（現在の首都大学東京）の生物学科に入学しました。生物進化の研究がしたいと思っていた私にとって、それを目の当たりにすることができる島が日本にあるということは大きな魅力でした。小野先生は既に退官された後でしたが、念願が叶って牧野標本館にある植物系統分類学研究室に配属になり、小笠原諸島の植物に関する研究に取り組むことができました。

多いときは年4回、一度の渡航で1ヶ月以上も小笠原諸島に滞在し、アオイ科のモンテンボクという植物の種分化に関する研究を行いました。モンテンボクは父島・母島列島の森林の主要構成樹種で、ハイビスカスの仲間の固有種です。形態計測や遺伝解析の結果、列島間で形態的にも遺伝的にも著しい分化が見られることや、種子の長距離散布能力を持たないことが明らかとなりました。私が卒業研究を始めた2000年はJohn C. Aviseの“Phylogeography”が出版されるなど、種内の遺伝構造から生物の分布変遷や種分化の歴史を探るいわゆる系統地理学的解析が盛んに行



小笠原諸島固有種モンテンボク（小笠原諸島父島）

われはじめた時期でした。長距離散布能力を持たないモンテンボクが、如何にして小笠原諸島に到達したのかを探るために、荒唐無稽とも言える研究計画を立て、博士課程・ポスドクの間五大洲20ヶ国以上を駆け回り、モンテンボクと近縁種の全球的系統地理学的解析を実施しました。その結果、モンテンボクは汎熱帯域海流散布植物のオオハマボウを母種として種分化したことを突き止めました。海流散布によって小笠原諸島に辿り着いた祖先集団が、内陸環境への侵入に伴って種子の長距離散布能力を喪失し、現在のモンテンボクが誕生したという進化の過程が見えてきました。

一連の研究で、野外調査での観察をもとに仮説を考え—研究を組み立て—探究するという、野生生物を対象にした進化研究の醍醐味を味わうことができました。また、目の前にいる生き物を注意深く観察し、先端的解析手法を駆使することで、生物進化の一端を垣間見ることに大きな喜びを感じました。ミュージアムでは展示や教育普及活動を通じて、一人でも多くの方と同じような喜びを共有できたら大変嬉しく思います。実現のためには、私自身が学術の第一線で活躍する研究者であり続けることが大切であると思っています。今後もNPO 静岡県自然史博物館ネットワークの会員の方々のご助言やご指導を賜りながら、生き物の魅力と研究の面白さを世界に発信していきたいと考えています。